
魔術師と獣人のお話し。

せーちん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師と獣人のお話し。

【Nコード】

N6688X

【作者名】

せーちん

【あらすじ】

ソルティ・アーカイル。

生まれ落ちた瞬間から世界最強の魔術師となった男が、8才の時に人間が蔑んでいる獣人の女の子と出会う。この話しは、子供のくせに立派なヤンデレ化した冷めた男の子がどう女の子をドロドロに愛していくかと言うお話です。結構王道。

「本当に子供ですか」

ソルティ・アーカイル。

彼がこの世に生を受けた瞬間から、彼の名前を知らない者は全世界の上流階級、魔に携わる者には居ないだろう。

彼が産まれた時、空が割れたという。

彼が産まれた時、花木が咲き誇ったという。

彼が産まれた時、魔力の波が世界を巡ったという。

生まれ落ちた瞬間から世界最強の魔術師となった男。

＊

「ソルティ、今日の世界はどう？」

アーカイル公爵の領地にある草原。そこに銀髪銀目、顔も綺麗に整った小さな男の子がいた。

「母様。今日は母様が生まれ育った国の森が何だか嬉しそうです。新しい生命が産まれたのかな。」

「まあ！ソルウの森の事かしら？あの森の主が、子を宿したと聞いているからその事ね！」

「ええ、きっと。だけど隣国は今日もきな臭いですね…。王が変わったばかりだというのに。」

「そう…。父様に言っておくわ。ほら、もう中に入りなさい。朝食の時間よ。」

「はい。朝食が終わったら、また魔の森に行って来ますね。」

「仕様がな子ね。暗くなる前には帰るのよ。」

アーカイル公爵家。大陸屈指の国、サウスロイスの有力貴族だ。

その家に8年前、4人目の子供となる男の子が産まれた。その子が生まれもった魔力は大きく、いや…大きすぎ、乳飲み子の頃は度々魔力の暴走で屋敷を半壊させていた。時には街にも被害が及んだという。

当主は子と領民を思い、屋敷を領地内の人里離れた所、他国にも恐れられる「魔の森」近くの緑豊かな場所に移した。

ソルティが暴走した時、死なない程度に実力がある者を使用人に付け、子が伸び伸びと育てる環境を作ったのだ。

ソルティは家族に恵まれ、環境に恵まれ、使用人に恵まれた。

そんな中で、早くから魔力の制御を覚え、一を聞いて十を理解する頭の良さから、一流の魔術師でも使えるのは一握りという最上級魔法も、まるで呼吸するように扱えた。

勿論他国は畏れたのだろう。国の軍を上げて攻めても、恐らく彼一人に壊滅される。そしてこう考えるだろう、幼い今ならば――。

ソルティが物心付く前には、すでに命を狙われていた。だがソルティにとって、魔法は呼吸と同じ位身近なものだ。4才になる前程から、例え複数人でも撃退できる様になっていた。

そして8才現在。彼は毎日魔の森に入り浸り、強い物と戦いますます殺しにくい存在になるのだった。

「ご馳走様でした。とっても美味かったです。」
にっこり笑って使用人に礼を言い、席を立つ。

「それじゃあ父様、母様行って来ますね。」

「ああ、ソルティ待ちなさい。」

いつもの様に森へ出掛け様としたら、父様に止められた。

「どうかしましたか？父様。」

「隣国のことだ…。詳しく教えてくれ。軍はもう集められているのか？」

「…いいえ。ルカドニア候を中心とした貴族が新王を唆し、戦争による甘い汁を吸おうとしている様です。他の貴族は反対しているけど、王は乗り気ですね。自分の力を誇示したいのでしょうか。集めるとしても三月程後になるでしょうか。」

隣国は王が変わったばかりだ。ルカドニア候はその時を狙ったんだろう。ルカドニア候の事業は今落ち目ですしね。

「そうか…。皇帝に報告する必要があるな。今日は城に行ってくる。」

「わかりましたわ。ソルティも、気をつけて行って来るのよ。」

「はい。行ってきます。」

魔法には、自分の魔力がある所ならその場の事を感じ取れるものがある。

普通は周囲6メートル程が感知できればいい方だが、

ソルティは生まれた瞬間から意識すれば世界の全てを感じ取れるのだ。

だからこそ、8才にしてここまで早熟なのだろうが。

「ウィー、お早うございます。」

魔の森の入口付近。ソルティが来るのを待っていたのだろう、美しい銀を持った大きな狼が身体を起こす。

グルウ、と喉を鳴らして返事をし、ソルティと共に森の中心部へ向かっていく。

「今日はちょっと試したい魔法があるんです。付き合ってくださいか？」

ソルティはこの森に十二分に実力を見せつけ、もう理性も知性もない魔物か力を過信した魔物しか襲ってこなくなった。

なので最近は大体、ウィーと模擬戦（という名の本気の殺し合い）を中心に自分を鍛えている。

ウィーの了承の返事を貰い、微笑みながら少し空けた場所にでる。

「じゃ、行きますよ。」

始めはいつも通り接近戦。剣を持ち、大人の男程のスピードで切り掛かる。ウィーはそれを技と紙一重で避け、近づいたソルティの首元に爪を立てる。

ソルティもそれを余裕で避け、遠心力を利用して回し蹴り。蹴りを受けたウィーが後ろに飛ぶのを追い掛け、剣で追撃する。

ウィーもそれを避けながら牙で爪で身体で応戦し、暫くたった頃からふたりとも魔法を使い出す。上級、中級、初級、たまに最上級。属性は様々で、ウィーが中級の炎を使えばソルティは初級の水で消す。ソルティが最上級の光と土の混合魔法を使えば、ウィーは上級の風で相殺させる。

数時間戦い続け、昼過ぎになった頃にふたりで獲物を狩り昼食。また戦いに戻り、日が暮れる前にソルティは帰宅。帰宅してからは勉強。

そんな毎日だった。

＊

2週間程たった頃。その日もソルティは朝から魔の森に来ていた。だが今日はなんだか森がおかしい。

魔物が騒がしわけでも、森が騒がしいわけでもない。ただ、何かが違う。ウィーと合流した後、ソルティは魔の森に意識を集中する。森中の感覚が頭に入ってくる中、理由を見つけた。――女の子だ。それも獣人の。

ソルティは少女の感覚を取らえた時、衝撃が走った。

「ウィー、西に3マイキ程。急いで下さい。」

ソルティはウィーの背に乗り、急いで指示した場所に向かってもらう。

自分より小さい位の獣人の女の子は、戦っていた。自分を食そうとする魔物たちから、ボロボロになって。

獣人は蔑まれる。サウスロイス国はそうでもないが、隣国では特に顕著だ。

本来人より優れる獣人を数で圧倒し、奴隷にすることで虚栄心を満たしているのだろう、とソルティは考える。

恐らく数分も掛からなかった。人間が歩けば数時間かかる距離でも、ウィーが本気を出せばこの程度だ。ソルティはウィーの背に乗っている間、ひとつの魔法を使っていた。

女の子は懸命に剣一本で応戦していたが、数が数だ。押され始めていた。もう集中力は切れかかり、この場で死ぬ覚悟もでき始めていた。その時到着したソルティ達。

ウィーが魔物を威嚇し、ソルティが魔法で魔物を半分程潰した（・・）。

「…行け。」

ソルティが呟くと、残りの魔物は一斉に逃げ出す。もとより追う気はない。

一瞬だった。誰かがきたと思えば何故か自分が死ぬ気で戦っていた魔物が死に、残りは逃げていく。呆然とそちらを見るが、はっと我に返り剣を持ち直す。

「…大丈夫ですか？」

大きな狼。その上から降りた、まだ自分とそう年の変わらなそうな少年が言う。

「来ないで…っ来たところす！」

勿論この少年を殺せるとは思っていない。自分は強い部類だと思っていたが、彼は自分の数倍強いだろう。

ソルティは微笑む。少女が殺意を向けながらも、泣きそうな顔を隠している事に気がついてからだった。

「大丈夫ですよ。私は剣を捨てます。…いいですね？君を傷つける気はありません。」

どこまでも優しく言い、剣を離れた所に放った。

「…まほうがつかえるでしょ。あなたがわたしを助けるりゆうはない。」

「そうですね。ですが、私がここを離れたらまた別の魔物が来るでしょう。その状態で戦えますか？」

少女はもう傷だらけだった。今にも気絶しそうだ。

「…あなたはだれ？どうしてこんなところにいるの？」

ソルティに着いて行っているのか、迷っているのだろう。こんな小さな子供が。

「私の名前はソルティ・アーカイル。この森の近くに、家族で住んで居ます。」

「ソルティ・アーカイル…？」

少女の目が徐々に見開かれる。

「あの、まじゅつしのソルティ・アーカイル？」

「ええ。恐らく君の言っているソルティであっていますよ。」

ソルティは微笑みを絶やさない。

「あ…じゃあ、ここはマードイルじゃない…？」

マードイルとは、最近不穏な動きをしている隣国だ。ソルティは眉をしかめそうになったが、少女が不安がると思い堪えた。

「ええ。ここはサウスロイス国。君の名前を教えてくださいませんか？」

少女は少し迷ったが、素直に言う。

「……ユウイ。」

「ユウイ。まずは治療をしましょう。このままでは危ないですよ。」

ソルティが言うと、ユウイはまた少し迷った後頷いた。

「そちらに行ってもいいですか？」

「……うん。」

ソルティはにっこり笑って、ユウイに治癒魔法を掛ける。

「…すごい、これってじょうきゅうまほう？」

「そうですよ。きっとユウイも直ぐに使えるようになります。」

「ほんとう？」

「ええ。たくさん頑張ったら。」

ユウイの傷は酷かったが、ソルティは数秒で治す。

「ユウイ。どうしてこの森に居るのか聞いてもいいですか？以前はマードイル国にいた様ですが。」

「……………」

ユウイは何も喋らない。

「まあ、どうでもいい事です。大事なのはこれから。…行く宛てはありますか？」

「……………」

「じゃあ、うちに来なさい。父様の許可が必要ですが、恐らくいいでしょう。」

ユウイはぼつと顔を上げる。

「…なんで？」

目には期待と、疑問と、畏れがあった。

「何ででしょうね？」

ソルティは悪戯っぽく笑うと続ける。

「ユウイに何があったかは聞きません。だけどアーカイル家に居れば、大体の事からは護れますよ。」

ユウイの顔がくしゃつと歪む。そのまま、声も失く泣き始めた。ソルティは抱きしめ、安心させる様に頭を撫でてやる。

「…大丈夫。もう眠っていいですよ。起きても私は側に居ます。」
ソルティは眠りの魔法を掛ける。
ユウイは一瞬抵抗したが、すぐに力を抜いた。
そして眠りに落ちる。ソルティが至極満足そうに、楽しそうに、嬉しそうに笑った事など気付かずに。

＊

「ソルティ様！？そちらの子供は…？」
ユウイをウィーに乗せたまま屋敷に着くと、使用人は大慌てだった。敬愛してやまないソルティが、泥だらけの小汚い獣人を連れ帰ったからだ。

「この子はユウイ。私の客人ですから、丁寧をお願いしますね。」
ソルティはにっこり笑い、父の所在を尋ねる。

「だ、旦那様は執務室におられますが…。では、その子供は客室に…？」

使用人は少し難色を示す。汚れた獣人を、高貴な方のために美しく整えてある客室に入れたくないのだろう。

「ニール。私の客人だと言いましたよ。」
ソルティが笑顔のまま言うと、使用人――ニールは顔を青ざめる。

「つも、申し訳ありません！直ぐに用意させて頂きます。」

「ありがとうございます。私は父様の所へ行ってきますので、…サデス。ユウイを頼みます。」

ユウイは古くからアーカイル家に勤めているサデスに託す。

「畏まりました。御召し物はどう致しますか？」

「ユウイが気付いたら着替えさせるので、用意を。」

「直ぐに。」

サデスは礼をして、客室に向かう。

ソルティも父の居る執務室へ向かった。

「失礼します。父様。」

「ああ、ソルティ。調度よかった——どうした？何かあったのか？」

父——ハウズール・アーカイルは何かに気付いた様に言う。

「ええ、父様。実はとても大切なものを見つけたのです。」

ソルティの笑顔を見て、ハウズールは目を細める。

「ほう？…それはソルティが連れてきた、獣人の女の子か？」

ソルティがサデスに頼んでいる間に、誰かが報告したのだろう。

「はい。この屋敷に住まわせても構いませんか？」

「…ふ、はははっお前にそんな顔をさせる子だ、いいに決まっている。…だが、ソルティが連れて来たという事は魔の森からだろう。」

「マーダイル国からいつの間にか魔の森に居たそうです。」

「獣人でマードイル国に魔の森：面倒な事になりそうだな。何があったかは分かっているのか？」

「ええ。助けに行く際、魔力で探ってみたらルカドニア候派閥の貴族が焦って探していましたよ。恐らく……」

「……そういう事か。」

あの幼さでの強さ。ソルティは例外中の例外だか、普通では有り得ない。

元々戦闘に特化した獣人を、更に鍛えていたのだろう。それをしてるのが最近きな臭い隣国：戦争に獣人を使おうとしているのは明らかだ。

「：今すぐ皇帝陛下の耳に入れなければ。ソルティも来なさい、この間の事で陛下はお前から直接隣国の話しを聞きたいと文を寄越していたんだ。」

最初に言おうとしていた事はこれだったのか。

「嫌ですよ。ユウイに起きたら側に居ると約束したんです。」

ソルティが間髪入れず断ると、ハウズールはかなり驚いた顔をした後、笑い出す。

「……はははっ！そうか！それは仕方がないな！だが、陛下の命だ。私が着く頃に転移で来なさい。」

「ええ。そうします。」

転移は最上級に入る魔法で、自由に行き来できる者は世界にも6人。その中にはソルティも入っている。

ハウズールは上機嫌のまま出て行き、ソルティもユウイの居る客室へ向かった。

＊

ソルティは冷たい人間だ。8才の子供に何を言うかとも思うが、そうとしか言いようがない。

幼い頃から命を狙われ続け、初めて人を殺したのは生後6ヶ月。記憶にある中では3才と2ヶ月。

大人が何を思っているか、何を考えているか「感じて」しまい、人間の汚さを嫌が負うでも見せつけられる。

自分に対する恐怖、敵意、打算に計算。

人の欲に対する気持ち悪い程の感情。

家族に情らしきものはあるが、他人よりましなだけ。恐らく死んでも悲しまないだろう。そして、それを父も母も兄も姉も分かっている。ソルティはそれも知っている。

他人が自分にどれだけ恐怖を持っているか分かっているから、常に笑う。明るく礼儀正しく振る舞う。

他人に善く思われたいからではない、自分を畏れ排除しようとしてくる者を殺すのが面倒だからだ。

きつと今日、魔の森で死にかけていたのがユウイではなかったら、ソルティは意識に止めなかっただろう。ああ、食われるな、と思う

くらいだ。だか襲われていたのはユウイで、魔力を使いユウイを感じた瞬間、『見つけた』そう思った。

これは自分のものだ。自分のものにしなければ。そして自分も、この子のものだ。

く一石何鳥ですか

公爵領から城まで、小竜を飛ばしても4時間程かかる。

ソルティはユウイが眠る部屋を訪れていた。

暫く寝ていなかったのだろう、ソルティが入ってきても身動きひとつしない。ソルティは、黙ったままユウイの頬をそつと撫でる。

「…可愛いですね。客観的に見て顔が特別整っている訳でもないのに…。」

若干酷い事を言いながら、愛しげに見つめる。

「可愛いユウイに似合う可愛い服を用意して…、ああ、部屋もいりますね。私の隣にしましょう。」

決定事項だと頭に書き留め、どんな部屋にしようか考える。

「…ふふ。可哀想なユウイ。魔の森なんか居るから私なんかに見つかる。」

ああ、そういえば何故魔の森に居たかも調べなければ。マードイル国とは余り近いとは言えませんが…。

「きっと私はもうユウイを手放せないでしょうね。…大丈夫。私がユウイには手を出させませんよ。」

ソルティは自分を理解している。自分の影響力を。

これからも、自分には暗殺者が訪れるだろう。その時自分が可愛がるまだ幼いユウイに、その手が伸びる事は必然だ。

「…観察者もかなりの数が居ますしね。」

自分がユウイを連れ帰った事は、もうすでにそれぞれの権力者に伝わっている頃だ。

「取り敢えず、ユウイに手を出した人間は片っ端から消しますか。」
観察者を殺すことは出来ない。自分を畏れている者達は「監視している」ということで安心していているのだ。それを消せば、一気に恐怖は膨れ上がり馬鹿な行動に出る者は多いだろう。

「…面倒ですね。まあ何度か繰り返せば、馬鹿も居なくなるでしょう。」

根元まで絶ち消せばいいのだ。ユウイを狙えと指示したであろう者達が、次々と不信な死を遂げればさすがに分かるだろう。ソルティは狙われても返り討ちするだけ。だかユウイに手を出せば殺されると。

「ユウイ…。」

長い間ユウイを眺めていると、ノックが聞こえた。サデスだろう。

「どうぞ。」

「失礼致します。お客様のお召し物をもって参りました。」

「ありがとうございます。それから、ユウイは客人ではなくこの屋敷に住む事になりました。他の者にも伝えて下さい。丁重に扱う様にと。」

サデスは一瞬驚いた顔をしたが、すぐに頷く。

「承知致しました。…ソルティ様。今週末キウティ様が帰宅されるとの事です。先程文が届いたと、奥方様が言っておられました。」

「…そうですか。ありがとうございます。ああ、後部屋の用意をお願いします。私の隣を。少女らしく縫いぐるみやクッションで沢山

にしてください。」

「畏まりました。他に何か御用はございますか？」

「明日、仕立て屋を屋敷に呼んで下さい。カタログも幾つか持って来る様にお願います。…今の所は以上ですね。突然仕事を増やしてしまつてすみません。」

「とんでも御座いません。では、長々と失礼致しました。」

サデスは礼を取って部屋を出ていった。

「…さて。調べ物をしなければいけませんね。ユウイ、そのまま城へ行くので、もう暫く寝ていて下さい。」

ユウイに眠りの魔法を更に強く掛け、ソルティは部屋を出ていった。

＊

ソルティは隣国マードイル国に意識を向ける。

——ルカドニア候派閥の中級貴族。

ユウイはどこから連れて来たのか、どう扱ったのか、何故魔の森に転移できたのか。

貴族中心にのみ意識を向けると、伝わって（……）来る。

焦り、怒り、畏れ、恐怖。

——なぜ逃がした。なぜ逃げた。

――獣人の分際で、人間様に逆らいおって。
――どうする？王に、ルカドニア候に何と言う？
――もしあの小娘から情報が漏れれば私は…。
――いや大丈夫だ。転移の先は魔の森。もう死んでいるだろう。
――だがあの森にはソルティ・アーカイルが出行していると…
――っあの小僧に知られたら…！
――報告するべきか？いや私が消されてしまう…！

焦りばかりで要領を得ない。
周りの人間にも意識を向ける。

――ああ、当主が消されたら俺はどうなるのか。
――今当主を殺れば、ルカドニア候の覚えも目出度くなるかもしれない…！
――あの馬鹿がソルティ・アーカイルに手を出そうとするから…。
――その為の転移陣で獣人如きに逃げられたなんて、いい恥だな。

……私が目的でしたか。

ユウイも恐らく手荒に扱われていたのでしょう。
……殺りますか？
いや、そのお陰でユウイは私の手の中に来たのですから、感謝するべきですね。

とにかく、隣国の処置は陛下と話し合ってからだ。

そう決めたソルティは、次にもうひとつの場所へ意識を向ける。

キウティ——現在、王都立魔術学園に通っている二番目の兄だ。

長男は自分を理解し、程よい距離で接してくれるが、次男であるこのキウティは面倒この上ない。

ソルティの才能を妬み、化け物と呼び、ソルティの本性と魔力を畏れている。

しかしそれを認める事なく、何かと突っ掛かってくるのだ。

ユウイが屋敷に来たから帰ってくる訳ではなさそうだが、確認はしなくては。

キウティは人間がこの世で最も優れていると信じ疑っていない。

獣人であるユウイには辛く当たるだろう……そろそろ兄にも思い知らせなくてはいいかもしれませんね。

ソルティは考えながら、キウティを感じる。

帰宅する事への不満、ソルティが屋敷の者から好かれている事への不満、自分の扱いへの不満。

大していつもと変わらない。

まだユウイの事は知らない……。

ソルティはそこまで想って、時間が大分経過している事に気づく。
ユウイの所に居すぎましたね…。皇帝陛下の元へ行かなければ。

ソルティは転移の準備をする。

先に言った、自由に行き来する事が出来る6人。その中のソルティ以外は、大体一回に数十分から一時間ほどの時間を掛けて転移する。その魔法を、ソルティは3分程で済ませて城へ飛んだ（・・・）。

＊

着いた先は諸見の間。その場に父が居ることは確認済みだ。

「！ ソルティ…突然現れるんじゃない。」

「すみません、父様。 陛下、無礼を申し訳ありません。」

ソルティは申し訳なさそうな顔をして謝り、周りに居た大臣達も落ち着いた所で話を切り出す。

「陛下。私に隣国マーダイルの事で用だと伺いました。」

「ああ…今ハウズールから聞いた所だ。獣人を使って来るであろう事もな。」

ソルティは頷き、父に目配せした。

「陛下、その獣人は我がアーカイル家で保護するつもりです。ソルティが居る屋敷の方が安全でしょう。……恐らく、情報も握っている。そうだな？ソルティ。」

「はい。生きていると知られば、命は狙われるでしょう。」

ハウズールとソルティが言うと、皇帝は頷いた。

「そうか。ならばそれがいいだろう。ソルティ、隣国の軍の動きはどうだい？」

「……まだ兵の徴集もされていません。ただ、獣人をいつから訓練させているのか……。」

「王になる前にルカドニア候と何か取引していたのだろう……。獣人はどうにかして解放・保護しなければな。」

「ええ。戦争に獣人が出てきてはこちらの不利です。何とか今の内に……。」

父が言った所で、ソルティが口を出す。

「では私が潰してきてもいいですか？」

諸見の間に集まった者達は一斉に黙る。

「……どういう事だい？ソルティ。」

「実は保護した獣人の娘——ユウイを気に入ってしましまして。ユウイも仲間が心配でしょうし、何よりその貴族達が存在している限りユウイは怯えるでしょう。」

私はユウイを安心させたいのです——そう言って微笑んだソルティに、大臣達は顔を蒼く染めた。

何なんだ、この子供は。

皇帝の表情は変わらず、ソルティに聞く。

「……1人でかい？」

「ええ。相手の人数は把握していますし、獣人を抱えているのはルカドニア候派閥ですが所詮は中級貴族。最悪、兄の手も借りますよ。」

この場合の兄は長男だ。

「……いつまでに出来る？」

「そうですね…。暫くはユウイと居たいので。…1カ月以内には。」
それだけあれば、保護先も用意できるだろう。

「……そうか……。ならば頼もう。獣人は何人だい？」

「208人です。中でも上級魔術師が88人。彼らの魔力を借りれ

ば、一気に全員サウスロイスまで転移出来ますよ。」
ソルティは飽くまで微笑みながら。

皇帝を始め、その場にいた者達は息を飲んだ。獣人の数にだ。

獣人のみで一個小隊。

脅威である魔術師、それも上級魔術師が88名。

何も気付かず戦争していたら、自分達は負けていたかもしれない。

それほどに強いのだ。獣人は。

「……では一月以内に。何か入り用があれば言ってくれ。ソルティ、頼んだよ。」

皇帝の言葉で締められ、解散となった。

ソルティは転移でさっさと帰ろうとしたが、ハウズールに捕まれ小竜の元へ連れて行かれた。

「たまには父様と一緒に帰ろう。」

「……ええ、父様。」

ふたりで小竜に乗り、走り出す。

「ソルティ、良かったのか？ユウイちゃんを気に入った、なんてあの場で言っただけ。」

諸見の間には国の重鎮達が集まっていた。当然、ソルティにちよこちよこ暗殺者を送る者も何人かあの場に居たのだ。

「直ぐに分かる事ですから。」

「それで、自分はユウイちゃんの為ならぶつ潰しに行くぞと警告した訳か。…怖いなお前。」

ハウズールは苦笑しながら、本題を切り出す。

「…本当に1人で行く気か？どうせイルティを連れてく気なんてないのだろう。」

イルティとは長男だ。現在、魔術騎士団に勤めている。

「そうですね。まあ上の人間を殺し、施設を壊し、獣人連れて転移するだけなので大丈夫でしょう。」

ハウズールは眉を寄せる。

「獣人がソルティを襲って来たらどうする。彼らは強い。」

「父様。心配してくれて有り難うございます。」

ソルティはにっこり笑って、話を打ち切った。

客観的に見て、例え208人の獣人に襲われ様と自分が負けるとは思えなかった。

過信ではない。事実だ。

ハウズールはまた苦笑し、「一応イルティを呼び寄せておく。」と言った。

帰宅した時には、もうユウイの部屋は用意出来ていた。ユウイの眠りの魔法も切れる頃合いだ。

丁度良かったですね。

ソルティは食事を持ってユウイが眠る部屋に行った。

魔法で食事が冷めない様にしながら暫く待つと、ユウイは目を覚ます。

「……ん、」

「ユウイ。お早うございます。」

「っ！、あ……えと……」

「よく眠っていましたね。お腹は空いていませんか？」

「すい……た。」

ユウイは呟きながら、目線は食事に釘付けだ。ソルティは微笑んで、食事を渡す。

「何があったかは、覚えていますか？」

「……うん。えっと、ソルティに助けてもらった……」

「ええ。ここはアーカイル家。落ち着いたら、少し話をしましょうか。」

先に食事を食べる様に進めると、ユウイは戸惑いながら一口食べ……驚いた様に一瞬止まったあと、掻き込む様に平らげる。

「クスクス。誰も取ったりしませんよ。」

微笑ましくて笑うと、少し顔を赤くしながらゆっくり食べ始めた。

ユウイが食べ終わり、落ち着いた所でソルティは言い出す。

「ユウイ。君の過去を詮索する気はありません。ユウイはアーカイル家が責任を持って保護しますし、好きに生きていい。」

ユウイは戸惑う様にソルティを見上げる。

「ですが―仲間や、友人が居るのでは？ユウイが受けた苦しみを今尚受けている、家族が居るのでは？」

「……っ」

ユウイは目を見張った後、きゅっと強く瞑る。拒絶するかの様に。

反応したのは友人――家族は居ないのかもしれませんが。好都合です。

「私はユウイの悲しい顔を見たくないのです。：ユウイ。ユウイを悲しませる原因を教えて下さい。」

目線がさ迷っている。

「ユウイ：私の事を知っているのでしょうか？ソルティ・アーカイル。：出来ない事はありませんよ。」

期待する様に、光を見つけたかの様にソルティを見上げる。

「ユウイが望むなら、どんな事でもしましょう。ユウイの望みは何ですか？」

ユウイは泣き出す。勇気を出す様に、ソルティの服の裾をぎゅっと

握りながらポツリポツリと語り出した。

「わ、わたしが生まれたのは、マードイル国の森の里で…わたしが4さいのとき、国のひとがきて、みんな連れていっちゃったの。」

「お父さんとお母さんは、抵抗して、こ、ころされて、わたしは『しせつ』ってところでまいにち魔物と戦わされて…、」

「反抗したひとは、獣人のなかまにころさせて…みんな、あきらめて…だけど国のひとたちが使う『転移陣』を見つけたとき、みんながわたしを逃がしてくれたの…っ。」

「わ、わたしだけでも逃げろって。ぜったい後から行くから、先に逃げてろって。」

「けどみんな、来なくて、魔物におそわれて、もう、だめなのかって。わたしを逃がしたから、みんなころされちゃったのかなって。」

「なら、わたしもここで死ぬべきだって。思って、たら、ソルティが来たの…」

ユウイは少し黙った後、目に力を入れて言う。

「お、おねがい…ソルティ、みんな、たすけて。なんでもする。わたしにできること、なんでもするっ。みんな、たすけて…っ」

ボロボロと泣きながら。ユウイは言った。

ソルティはそれに微笑み、ユウイの額にキスをする。

「ええ。ユウイが言うなら。」

そのまま泣きながら、ユウイはソルティにしがみついた。

感情が高ぶっていたからか、幼いからかユウイの説明は分かり易いとは言えなかった。

だがユウイが言った事は大体知っていたのだ。里があった所に、貴族が念の為に搜索隊を出していたから。

だからユウイが捕まった経緯も、逃げた経緯も知っている。

だがそれをユウイの口から聞く事が大切だった。自分の為にソルティが動いてくれると、誰も助けてくれなかったのにソルティは助けてくれると思わせる事が重要だった。

「ユウイ、話してくれてありがとうございます。安心していいですよ。ユウイの友人はみんな助けましょう。」

「…みんな、た、すけてくれるの…っ？」

「ええ。ユウイは私の側に居るだけでいい。全て私がやります。」
「…っほんとう？」

「本当ですよ。ユウイは何も心配いりません。安心してこの家に居てください。」

「っわたしも！わたしもみんなを助けに行きたい…！」

「ユウイ…駄目ですよ。ユウイはまだ安息が必要です。疲労したま

ま行けば、みんなに心配を掛けますよ。」

「…うん。」

「いい子ですね。」

頭を撫でると、はにかむ。 …可愛い。

く懐かせましょうく

「…さてと。ユウイ、君の部屋に行きましようか。」

「へや？わたしの？」

「ええ。ここは客室なんです。ユウイはもうお客様ではなくこの屋敷の住人なのですから。」

微笑んで言うが、ユウイは不安気な顔をした。

「……ソルティとはちがうへや？」

……可愛い。

「部屋は違いますが、隣ですよ。大丈夫。室内からも扉で繋げましようか。」

決定ですね。近日中に工事させましよう。

ユウイはちよつと笑顔で頷き、ソルティの手を握ってベッドから出る。

「あのね、…ありがとう。わたしも、みんなも助けてくれて。」

ソルティは笑みが零れた。

「それはユウイの友人達を助けきってから聞きますよ。保護先を見つけてからなので、暫くは待たなくてはいけませんね。」

ユウイは少し残念そうな顔をしたが、我が儘は言えない。保護先があるのは幸せなことだ。

頷いてから、客室を出た。

「……ここが、わたしのへや？」

「ええ。気に入って頂けましたか？」

ユウイの新しい部屋は薄い桃色を基調にして揃えられており、ベッドには大小様々な縫いぐるみ、クッションでいっぱいだった。

「かわいい……。ひろい……。ここをわたしひとりで使っているの……？」

「勿論。ユウイの部屋です。」

「……うれしい。」

ユウイは涙ぐんでいる。施設に居た頃は、大部屋に男女関係なく放られていたので一人部屋なんて考えた事もなかっただろう。

「行きなりひとりだなんて淋しいと思いますが……。3日以内には私の部屋とも繋がりますからね。」

「うん！」

ユウイは安心した顔をして、手を繋いだままベッドに向かった。縫いぐるみが気になるようだ。

「これ、くまさん？」

「そうですね。熊の編みぐるみです。」

「毛糸が……。くまさんになってる。すごい……！」

「ユウイも作ってみますか？」

「わたしにも出来るの？」

「練習しなくちゃいけませんけどね。講師を呼びましょう。」

「こうし？」

「編み方を教えてくれる人ですよ。」

「へえー！ソルティも、いっしょに教えてもらおうっ？」

「……そうですね。一緒に習いましょうか。」

「うん！がんばるっ。」

ユウイは笑顔だった。それを見てソルティも笑顔になる。

「それでは、ユウイはもう寝ましよう。まだ身体は疲れていますよ。」

」

「……うん。」

「ユウイが眠るまでここに居ます。大丈夫。悪い人は居ませんよ。」

「……うん！」

部屋の明かりを消してユウイの目の上に手を翳す。

「おやすみなさい。ユウイ。」

「……おやすみない、ソルティ。」

疲れていたのだろう、ユウイは直ぐに眠りに落ちた。

ソルティはそれを確認して、そっと部屋を出る。廊下を渡り、ハウズールの所へ。

「父様。失礼します。」

「ソルティ。ユウイちゃんはもう寝たのか？」

「ええ、自室で。」

「そうか。……情報は？」

「私が掴んだ物とそう変わりません。数々の獣人の里から強制的に彼等に従わせ、徒党を作る事のない様に数人ずつに分け、反抗した者は同じ獣人に殺させる。毎日魔物と戦わせている様ですね。と、言うよりそれ以外をさせていないのでしょうか。」

「……醜いな。」

ハウズールは眉をしかめる。

「それで、何故ユウイちゃんが魔の森に居たのかは？」

「ああ……どうやら私を狙っていた様です。その為の転移陣を、ユウイを逃がす為に他の獣人達が利用したのでしょうか。」

「やはりソルティをか……。そこにも獣人を使うつもりだったのだろうか。」

「そうですね。それで私を殺せると思ったのでしょうか。」

二人で失笑した。

「舐められた物だなソルティ。」

「ええ、本当に。」

「まあ貴族達は何にしろ、大人数の獣人は警戒するに越した事は無い。先程イルティに文を出したから、イルティが到着するまで少し待ちなさい。」

「どちらにせよ直ぐに行動する気は有りませんよ。暫くユウイと居たいので」

「……………そうだったな。」

ハウズールは苦笑する。

「他に報告は？」

「有りません。ただ――」

「…何だ？」

「キウティ兄様の事です。」

思い当たる節があるのだろう、顔を歪ませて黙り込んだ。

「キウティ兄様がどんな形でも、ユウイに手を出したら…私は動きません。宜しいですね？」

確認だった。ハウズールは洪顔のまま、頷く。

「お話は以上です。では父様、失礼しました。」

そのまま父の執務室を出た。

今日は中々忙しい一日でしたね：

ソルティは自室に戻りながら考える。

明日は仕立て屋を呼んでいますから、ユウイを可愛く着飾りましょう。照れた様にはにかむ顔が目に見えかぶ。

編みぐるみの講師も手配しなくては。それから一般教養の講師も。本当に毎日戦闘しかしていなかったのだろう、ユウイは会話も少し拙い。文字の読み書きなどは恐らく習っていない。

男性は論外ですが、女性にしても身をわきまえ獣人を差別しない人間。サデスに言って置きますか。最終判断は私がしましょう。

ああ、ユウイを連れて街に出るのもいいですね。たくさん欲しい物を買ってあげたい。

ソルティは久々に充実するであろう日々を思い、一人暗闇の中微笑んだ。

*

あれから数日。ユウイは見違える程可愛くなった。

綺麗な服を着て、栄養価のある食事を食べ、髪や肌を磨かれる。頭の上に乗っている三角の耳も尻尾も肌触りは抜群だ。

ソルティはほとんどの時間をユウイと過ごした。朝にまずユウイを起こし、一緒に草原に行く。

自分が世界を感じて（・・・）いる間、ユウイは身体を動かしていた。

そして一緒に朝食を取り、街へ遊びに行ったり、魔の森に行ったり、たまにソルティが勉強を教えてやったりする。

母もソルティが大事な人を見つけ人間らしくなった事に喜び、ユウイを受け入れた。

兄妹たちにも恐らく話しが行ったのだろう、二人からは文が来た。ユウイに会ってみたい、というものだ。

キウティからは獣人を屋敷に入れるなんて——という内容の文だったが。

屋敷の極一部の使用人は未だに不満に思っている様だったが、ソルティの手前冷遇される事はなかった。

ソルティがユウイを保護し、色々な所に連れ回してから六日目。明日、キウティが帰ってくる。イルティが帰宅するのはその次の日だ。

この六日間、四度暗殺者が来た。その内二人はユウイを狙っていた。

ソルティはユウイに気付かせる事なく始末し、予定通りその夜雇い主であろう自国の貴族一人、他国の豪商を一人を滅茶苦茶に殺した。

ソルティが、依頼者である権力者を殺したのは初めてだ。他の人間もソルティが殺ったとは思えないだろう。だからソルティは花を残した。毒々しい紫色のアーティチョークを。花言葉は――警告。

今の所二人。あと十人程同じ様に殺し、同じ花を残せばいい加減分かるだろう。

その十人が直前に取った行動を。誰を狙った故に殺されたかを。

「ソルティー！これっ」

「どうしました？ユウイ。」

早朝、屋敷近くの草原。

「かわいいお花、みつけたっ」

ユウイが持って来たのは、綺麗なピンクのエリカだった。

「…可愛いですね。エリカですか。」

「えりか？」

「花の名前ですよ。」

「えりか…かわいい！」

見た目も名前も気に入ったのだろう。

屋敷の温室にエリカも入れましょうか。

「ソルティ、あげるっ。」

「え？」

「かわいいから、ソルティにあげる！」

「有り難うございます。ですがユウイも気に入ったのでしょうか？ 私
は……」

断り欠けると、ユウイの口がへ字に曲がった。

「…………じゃあ、いっしょに育てる。」

ああ、可愛い。きっと純粋に綺麗な花を私にと思ったのでしょうか。
歪んでいるのは私だ。

「いいですね。食卓に置いて、皆に愛でて貰いましょう。」

「うん！」

「一輪挿しを用意させなくては。ユウイ、そろそろ戻りましょうか。
」

ユウイは頷いて、ソルティの手を握って屋敷に向かう。

ソルティはその手の温もりを感じながら、苦笑した。エリカの花言
葉は――孤独。

私は孤独になる積りも、ユウイを孤独にする積りも有りませんよ。
そう考えながら、ユウイの手を握り返した。

「お帰りなさいませ。ソルティ様、ユウイ様。」

「ええ、只今帰りました。」

「ただいまです……」

「朝食のご用意出来て居ります。まだ皆様は席に着かれておりませ
んが……」

「朝食は父様達と一緒にお願いします。その前に、一輪挿しを用意
して頂けますか？」

「畏まりました。お花を預からせて頂きます。」

「有り難うございます。」

「あっありがとうございます。」

使用人はユウイには答えず、礼をして奥へ戻った。

平気な顔をしているユウイの頭を撫で、食卓の間に向かう。

「今日は何処に行きましようか？ユウイ。」

「えっと、えと、ウィーにあいたい！」

「では魔の森ですね。朝食を食べ終わったら、少し勉強をしてから行きましよう。」

ユウイの講師はまだ決まっていない。選考中だ。

「おべんきようすきー！」

「いい子ですね。」

「わたし、字、じょうずになりたい。ソルティみたいに！」

「たくさん練習しましょう。きっと上達しますよ。」

ユウイは笑顔で頷いたが、父と母が入って来るのを見て笑顔は消えた。

「おはよう、二人共。」

「お早うございます。父様、母様」

「おはようございます…。」

「ユウイちゃん、体調はどうかしら？」

「っだ、だいじょうぶです…！」

「良かったわ。」

母——マリーナはにっこり笑って、席に着く。

「サデス、食事を。」

「畏まりました。」

「今日の世界はどうだった？ソルティ。」

「母様が聞きたいのはウルウの森の事でしよう？」

ソルティは笑いながら言う。

「主の子は、順調に育っていますよ。少し風邪気味な様ですが…大丈夫でしょう。」

「ソルティが言うなら安心だわ。いつか二人も連れていって上げるからね。」

「楽しみです。ね？ユウイ。」

「はい…っ。た、たのしみ…。」

ハウズールとマリーナは微笑み、食事を再開する。

「ああ…ソルティ、ユウイちゃん。明日の夕方にはキウティが来るからな。」

「キウティに会うのは久しぶりだわ！今から楽しみよ。」

「そうですね…ユウイ、大丈夫。私とずっと一緒に居ましょう。」

ユウイが不安そうな顔を見ると、すかさずソルティは言う。

「そうよ、ユウイちゃん。ソルティが守ってくれるわ。」

マリーナが笑いながら言い、ユウイも頷いた。

「ごちそうさまでした。」

「ごちそうさまでした…っ。」

控えている使用人に言う。

「今日はどうするんだ？」

「私の部屋でユウイの勉強を見た後、魔の森へ行ってきます。」

「二人共、気をつけて行ってくるのよ。」

「はい…っ！」

*

「ではユウイ、次はここをやってみましょう。」
「うんっ。」

「……………ああ、この文はここをこちらに…。」

「あっ、そっか。えと…。」

「ゆっくりでいいですからね。」

「…うん。…こう？」

「ええ、合ってます。ユウイは頭のいい子ですね。理解が早い。」
「えへへ…。」

ソルティが頭を撫でると、はにかむ。

「ここまでやったらウィーに会いに行きましょう。」

「うん、がんばる！」

ユウイは一生懸命机に向かい、それを見るソルティには微笑みが零れる。

「…、正解ですよ。」

「ほんとう？ やったあ！」

「お疲れ様です。全問正解ですよ。良く頑張りましたね。」

「ソルティが教えてくれるから！」

ユウイは笑顔で言う。

「あのね、はやくウィーのところ行こっ。」

「そうですね。ユウイ、着替えて来なさい。」

「はい！」

元気に返事をして、つい数日前に取り付けた扉からユウイの部屋に行く。

ユウイは基本、人間が苦手だ。物心つく前から人間に虐げられていたのだから当然だろう。

懐くのはソルティと、少しだけマリーナ。

ハウズールの事は優しい人だと思っている様だが、大柄な体躯と実力から、本能的に強い人間だと分かるからだろう。少し怯えている。使用人に至っては、数人があからさまに獣人を蔑んでいるので全員を怖がっている。

ソルティはそれに満足していたが、同時に考えていた。このままでは不味いと。

――あと数人は、ユウイが懐く人間を作って置いた方がいいですね。人間ではなく、獣人の友人に着いて行くとされるのは困る。出来れば同学年で…。

「学園に行きますか…。」

王都立魔術学園は、基本的に金持ちが6才から通う学園だ。平民も居るが、かなり才能があるか頭が良くないと通う事はまず難しい。

ソルティも本来なら学園に居るべき年齢だが、習う事はもうない為に行く必要がない。それも学園は寮制だ。

暗殺者を呼び寄せるだろうソルティは、周りの生徒を庇いながら撃退する事が面倒だった。

だがユウイを繋ぎ止める為に必要なら、周りの生徒もその親もどうでもいい。

父に話を通しておこう。

「ソルティ、きがえたー!」

ユウイの服は森で動き回れる様、ズボンだ。

「可愛いですね、良く似合ってます。ユウイ、行きましょーか。」
「うんっ。」

歩いて15分程。木漏れ日が美しく気持ちのいい道だが、たまに魔物も出るのでユウイは警戒している。

「ウィー！」

ユウイは嬉しそうに声を上げ抱きつき、ウィーはグルル、とユウイを受け入れた。

ユウイが獣人だからか、単純にウィーが人間ではないからか、ユウイはウィーに良く懐いている。

……学園にはウィーを連れて行きましようか。使い魔契約をしておいた方がいいですね。

ソルティは考えながら、ウィーに挨拶をする。ウィーも答え、一行は森の中へ歩き出した。

「ウィー、次はわたしときょうそうねっ！」

「ユウイ、余り遠くへ行っではいけませんよ。」

「はあいついくよウィー！」

ユウイは最近、ウィーとの駆けっこがお気に入りだ。

といっても森を大きく何周もしたりするので、駆けっこと言えるのかは分からないが。

「……っはあ…また負けたー！」

ぐるう、と少し誇らし気に唸るウィー。

「惜しかったですね、ユウイ。だけど差は縮まっているじゃないですか。」

慰める様に頭を撫でようとしたら、ユウイは避ける。

ソルティはふっと笑った。最初は何故避けるのかと思ったが、どうやらウィーに勝ってから頭を撫でて貰いたいらしい。

——可愛いですねえ……。

それから果物を取って昼食にし、ユウイの軽い模擬戦の相手をしな

がら森で過ごした。

＊

夜、ソルティの自室。午前0時になる頃、ソルティとユウイの部屋を繋ぐドアから、ユウイが遠慮がちに顔を出す。

「……ソルティ、ねてる……？」

「寝ていませんよ。どうしました？」

「……、」

「おいで、ユウイ。」

ユウイがソルティのベッドに駆け寄る。

「一緒に寝ますか？」

「っうん！」

ベッドに飛び乗る。布団を掛けてやると、もぞもぞとくつついてきた。

「……あのね、キウティさまってどんなひと？」

「そうですね……。正直に言えば、人間至高主義者です。」

ユウイが息を飲む音が聞こえた。

「ユウイには辛く当たるかもしれませんが……明日から二日。私の側を離れないで下さい。」

「うん……あのね、」

「ユウイは此処に居ていいんですよ。私は居て欲しい。」
ここに居ていいの？

その言葉を、ソルティは言わずに言い切った。

ユウイはちょっと目を見張った後、嬉しそうに、嬉しそうにはにかむ。

「……ありがとう、ソルティ。」

「本心ですよ。ユウイ、もう寝ましょう。今日は沢山動いたので疲れたでしょう？」

「うんっおやすみなさい。」

「ええ、おやすみなさい。」

く潰しますか？く（前書き）

たくさん感想・ご指摘ありがとうございます^^
10/27 00:50直させて頂きました。

「潰しますか？」

夕方。ユウイは緊張でうるさい心臓の音が、ソルティに聞こえていないか心配していた。

「ユウイ。そんなに緊張しなくていいですよ。」
ソルティは優しく言う。

「う、うん……。」

「早めに切り上げて、部屋に戻りましょうね。」
ユウイは頷くだけで精一杯だ。

ソルティは苦笑してから、時間を確認する。そろそろ帰ってくる頃だろう。

思った所で、階下が騒がしくなる。

「……来た様ですね。大丈夫ですか？ユウイ。」
コクコク首を振る。声も出なくなっている様だ。
ソルティは思わずクスリと笑った。

「私から離れなければ大丈夫。……体調が悪いと、会わない事も出来ませんが。」

あまりの緊張振りにソルティは何度目かの言葉を掛けた。

「だいじょうぶ……ソルティのおにいさん、会ってみたいの。」
兄ならイルティの方がいい……そうも思ったが、ユウイの決定は変わらないだろう。ユウイは二人の兄に会いたいのだから。

そのまま階下へ降りると、マリーナがキウティを抱き締めている所だった。

「キウティ！もう、ろくに文も寄越さないで：元気そうで安心したわ。」

「ついこの間元気だって文を出したよ。母様は相変わらずだね。」
キウティは言いながら、母の腕から抜け出す。

「学園はどうだ？キウティ。」

「：いつも通りだよ、父様。」

そしてソルティとユウイに気がついた様で、あからさまに顔を歪める。

何か言おうとしたが、マリーナが阻んだ。

「あら！二人共やっと来たのね。夕食にしましょう。いつまでも玄関にいる物じゃないわ、積もる話しはそこでね。今日はキウティも居るから、とっても豪華なのよ。」

マリーナの声に促され、5人は食卓の間へ向かった。

「それではサデス、食事を。」

ハウズールが言い、サデスが配膳をする。

「キウティ兄様。お久し振りですね。お元気そうで何よりです。」
ソルティはにっこり笑って言った。

「はっお前も相変わらずなようで。ああ、一匹小汚ない獣がくっついてるようだけど。」

キウティは嘲笑う。

「あ、は、はじめまして、ユウイです……えっと、このあいだから、」

「喋らないで貰える？獣の鳴き声を聞きながら食事する趣味はないんだ。」

「ご、ごめんなさ……っあ。」

慌てた様にユウイは口に手を当てる。隙間から、唇を噛みしめているのが見えた。

ソルティは目を細めたが、結局何もせず。

「はは、キウティ兄様も相変わらずな様ですね。」
笑って流した。

それに少し驚いた顔をしたのはハウズールだ。

「もう、キウティ。ユウイちゃんに酷い事言うのは止めなさい。それより、学園の事をもっと話して？」

マリーナが場を繕う様に言い、キウティもそれに乗り話し出す。

「ああ、この間の試験では8位だったよ。」

誇らし気に。

「まあ！8位？凄いじゃない！」

実際凄い事だ。生徒数はひとつのレベルに恐らく200人強。

「クラスで一桁は僕だけだったんだ。先生に表彰されちゃったよ。」

「良くやったキウティ。次もこの調子で頑張れ。」

「うん、父様。」

学園には、人数が多すぎる為、6〜10才まで通う初等部、11〜15才まで通う中等部、16〜18才まで通う高等部がある。

それぞれの等部の年齢範囲内ならば、年齢の区別なく実力でクラスに振り分けられる。

レベルA〜Fがあり、大体の子供はレベルFから始まり、一年毎にひとつ上のレベルへ上がっていく、という訳だ。

中等部から高等部へは、レベルCまでの生徒しか進学できない。

故に多くの生徒は中等部まで学び、それから家の仕事だったり覚

えていく。

キウティは現在13才、中等部レベルEだ。詰まり普通に進学しているということ。

来年にはレベルDになるだろう。

「おめでとうございます。キウティ兄様も高等部まで行けそうですね。」

「まあな。」

イルティもレベルA生として高等部に進んだ。

「楽しみね、卒業後はキウティも魔術騎士団に入るのかしら？」

「うん、そのつもり。体も鍛えてるんだ。」

魔術騎士団は所謂、花形だ。末端でも所属していると言うだけで、羨望と尊敬の的になる。

「イルティも血を吐きながら鍛えていた。キウティもきついだろう。」

「

「そうでもないよ。合ってるのかな。」

「：：そうか。それは凄いな。」

質と量が違うのだろう、という言葉ハウズールは飲み込んだ。

食事は最初以外、始終和やかに終わった。

ユウイは一言も喋らなかった。

食事後も暫く談笑し、ソルティとユウイが部屋に戻ろうとした時。キウティが追い付き、廊下で呼び止められる。

「おい、ソルティ。」

「キウティ兄様。何ですか？」

「その獣の事だよ。」

ユウイの顔が少し強ばる。

「一体いつまで置いておくつもりだ？ 屋敷が獣臭くなっているよ。」

ソルティは苦笑する。

「ユウイはもうアーカイル家の保護下と決定しているんですよ。聞いていませんか？」

「聞いたよ。人間に飼われていたんだって？ そんな薄汚い獣、何匹も飼って何になるのか分からないね。」

ユウイの足に力が入る。キウティに殺意が向けられるが、本人は気づいていない。

ソルティはユウイの頭を撫で、自分に寄り掛からせる。

「そもそも仲間の獣はどこに？ まさか共食いか？ 下等な獣にありそうな——」

「キウティ兄様。本当に聞いてないのですか？」

“念話”だった。本来念話は相手の許可を得て繋げる、上級魔法。それを一方的に聞かせるのは、相手の波数に無理矢理魔力を振じ込む様なものだ。

かなり高度で、繊細。

「ユウイは私の大切な子です。今まで私の事では構いませんでしたが——ユウイを傷付ければ、私も動きますよ。」

目を細め、局地的にキウティへ殺気を飛ばすと、さすがに気付いた。

「……上級魔法……!?!」

顔を蒼くし、鳥肌を立てる。

こいつは化け物だ。知っている。しかし僕は畏れてなんかないはずだろ。

こんな獣の一匹、僕が好きに出来ないはずがない――
へ……分かって居ない様ですね。ユウイはキウティ兄様よりも数百倍価値があると言っているのです。貴方如きがユウイを貧ずしてはいけないですよ。▽

「――っ」

ソルティの殺気が強まった。耐えきれないのだろう、ガタガタと震え、今にも倒れそうだ。

ソルティは、意識を無くす一瞬前に殺気を消した。

「ユウイは獣ではなく獣人ですよ、キウティ兄様。私たち人間より優れた所を沢山持っています。」
にっこり笑う。何もなかった様に。

「分かって頂けますよね？頭の宜しい兄様なら。」

確認する様に言うと、キウティは首をガクガク縦に振る。

「良かった。……それで、ユウイ何か言い掛けだったのでは？」

一瞬意味が分からなそうだったが、直ぐに理解できたのだろう。信じられないと顔を歪めるが、ソルティが目を細めるとビクツとする。

「、悪かつ……た……」

絞り出す様に言うと、ソルティはまた笑った。

「ユウイ、兄様がすみません。……許して頂けますか？」

ユウイは着いて行けてなかった。
自分を侮辱していたキウティが、なぜいきなり脅えているのか。増して謝った。

良くわからなかったが、とりあえず頷く。

「許して頂ける様です。良かったですね、キウティ兄様。」

そこまで言って、ソルティはユウイを促して背を向ける。

「では、おやすみなさい。キウティ兄様。」

ユウイも訳が分からないまま頭をぺこっと下げ、ソルティに続いた。

残ったのは、ソルティ達が居なくなったことで気が抜け、膝を付いて冷や汗を流しながら二人を睨み付けるキウティだけだった。

＊

「ソルティ、ソルティ。さっきのなに？ どうしてキウティさま、…」

「少し怒っただけですよ。ユウイを悲しませたのですから。」

「……………かなしんでない。」

「そうですね。私が嫌だっただけです。」

頭を撫でると、ユウイの目が少し潤む。

「ユウイ…辛かったでしょ、怒りも湧いたでしょう。良く我慢しましたね。」

「…、…っ。」

「もう泣いていいですよ。」

「…ふ、っ…、うえ、」

ソルティは頭を撫で続ける。

暫く泣き、ユウイはそのまま眠った。

深夜。屋敷は静まり返っていた。そこを歩く人影――ソルティ。ユウイを自室のベッドに寝かせた後、側に付いていたが、ハウズー

ルから念話で呼ばれたのだ。

「父様、失礼します。」

「ああ、ソルティ。すまないな夜に。」

「いえ、大丈夫です。：キウティ兄様の事でしよう。」

「ああ：。どうする積りなのか、と思ってな。」

ソルティは笑って答えない。

「サデスから報告は受けている。暴力はなく、殺気だけ。それも謝らせるなんて、キウティは黙っていられる程大人ではない。」

キウティはプライドが高い。また何かするだろう、とハウズールはユウイを心配しているのだ。

「：ソルティ？何を考えている。」

これを聞いたかったのだろう。

「父様、私学園に行こうと思います。」

「――！」

だがソルティの答えは的外れだった。

それを置いても、ハウズールは驚く。

「……学園に？ソルティが？ユウイちゃんとか？」

「ええ。ユウイの友人を増やそうと思ひまして。」

「そう、か：いや、親としては嬉しい。ソルティも友人を作ってくれればと――」

ハウズールは、何かに気付いた様に言葉を止める。

「……ソルティ。技とか。」

「何がです？」

「技とキウティを半端に抑え込んだのか……。」

ソルティはにっこり笑って、言う。

「ええ。障害物は、消すまではいかなくても早めに潰さなければ。」

ソルティ達が学園に行く事になれば、当然初等部。キウティは中等部だが、何かしら仕掛けて来るだろう。

自分は学園に来たばかり。不慣れ故に、隙が出来るかもしれない。

ならば今の内に、屋敷にいる間に逆らう気を無くしてやろうと。弱味でも握っておこうと。

それにはユウイへの暴言では足りないので、こちらが煽って行動に移さねばいい。

故のあの行為である。

「……では、何故最初はキウティに好きにさせていた？ユウイちゃんには傷付いていただろう。」

夕食の席での事だ。ソルティならば抑えられただろう。

「人間の友人は作る積りですが、人間にもどうしようもない人は居ますから。全員に気を許すのも困ります。」

つまりキウティは「どうしようもない人」の例なのだ。それに、とソルティは続ける。

「ユウイは人間に反撃する事も覚えなければいけません。いつまでも怯えさせるのは可哀想ですからね。」

「……。」

ハウズールは何も言えない。ソルティもユウイも可愛いが、勿論キ

ウティも可愛いのだ。

それでも止めないのは、ハウズールがキウティの欠点も理解しているからだろう。——出来れば、改善して欲しいと。

「…いつ、キウティは行動すると読んでいるんだ？」

その言葉に、ソルティはまた笑った。

「——今夜。」

*

「くそつくそつ…！」

キウティは眠れなかった。あんな獣を父も母も庇う。使用人もほぼ受け入れている様だ。

それも気に入らないが、一番はソルティ。

獣を屋敷に匿い、信じられない事に可愛がっているという。

大切な子？ 獣だろう！

その上僕が、この僕が！ 獣に謝らされた！ 人間の中でも秀でている僕が、家畜にも劣る獣に！

そんな事があっていい訳がない。処分してやりたい。獣を殺して罪に問われる訳がない。

……だが…あの化け物がいる。ソルティが、あの獣に手を出したら

動くといった。

つなにを考えているんだ僕は。あいつは弟だ。5才も年下だ。僕が
あいつに劣っている訳ない！

それでも、あの殺気を思い出すと……だからといって、獣が、獣が
この屋敷に住み着くのを許す訳には……！

——そうだ獣を森に返そう。

ソルティも言っていた。魔の森から拾ったと。

ならば魔の森に返すべきだ。そうすれば5分もせずに死ぬだろう。
僕が直接手を出す訳じゃない。いや、ソルティなんて気にしてない
からどうでもいいが。

だが、捨てに行くとしてもいつ行くか……

ソルティが獣を構う事を嫌っているニールに寄れば、二人の部屋は
室内で繋がっているらしい。ソルティが居ない時でなければ直ぐに
バレるだろう。

ニールに探らせよう……考えて、キウティは室内にあるベルを鳴らし、
ニールを呼ぶ。

「お呼びですか、キウティ様。」

「うん。少しあの獣と話がしたくてね。だけどソルティはいい顔を
しないだろう？」

ニールは目を輝かせた。キウティなら、ユウイを口弁で追い出して
くれると思ったのだ。

「そうでございますね。大分あの少女を可愛がっている様ですから。
……今ならば、ソルティ様はハウズール様に呼ばれておりますが……。」

「今？」

キウティは驚いた顔をする。

「はい、つい先程……暫くは居られる様で、お茶とお夜食をお運びし

ました。」

「夜食も…という事は、数時間は話されるんだね。」

今するべきか？とキウティは思う。だが急過ぎかもしれない。魔の森まで歩いて15分。小竜を使えば3分も掛からない。眠りの魔法であの獣を眠らせれば…。

「…そう。僕の小竜はいつもの厩舎にあるよね。」

「？ はい。」

「じゃあ、もう下がっていいよ。父様とソルティには秘密ね。二人で話がしたいから。」

「畏まりました。…では失礼致します。」

ニールにはもう意識もくれず、キウティは魔法を準備する。

前準備もせずに魔法を使えるのは、一流の魔術騎士くらいだ。

魔力を溜め、眠りの魔法の術式を組み立てておく。

それから風の下級攻撃魔法も。

キウティが一度に準備できるのは、ふたつくらいだ。

キウティは護りの加護が付いているローブを羽織り、部屋を出た。

＊

「ああ、動きましたね。やはりニールに夜食を持ってきて頂いて良かった。」

「…ニール。」

あの馬鹿、とでも言いそうな表情をするハウズール。

「大丈夫です。誰も殺したりしませんから。」

＊

明かりもつけずに廊下を歩き、キウティはユウイの部屋をそつと開ける。

獣人故に耳もいいユウイは扉が開く音に目を覚ます。今までの生活故もあつただろう。

「――っ」

キウティだと気付き、今夜の自分への態度からいい訪問ではないだろうとソルティを呼ぼうと口を開けたが、一瞬先に魔法を使われる。抗えずに意識が遠退く中で、ソルティを思い浮かべた。

「…はっ。獣風情が焦らせやがって。」

キウティは呼吸を落ち着かせる。

ソルティを呼ばれるなんて溜まったものではない。

「さっさと小竜へ運ぼう。」

キウティは13才。ソルティの様に魔法で重力を操れるならともかく、ユウイを抱えられる程筋力はない。

結果、引きずった。腕を持ち、壁に当たるのも階段も気にせず引き摺る。

それにソルティが別室で怒りを露にするのも知らず、そのまま小竜へ乗せ、魔の森へ。

「さすがに不気味だな…。」

入り口近くまで来たが、余りの不穏な森に小竜は足を止めてしまう。
「ちっ動け！速く歩けよ！」

いくら蹴っても、怒鳴っても小竜は進まない。

キウティは気付かないが、脅える先にはウィーが樹に隠れ無音で怒っていた。

「役立たずがっ」

キウティは悪態を付き、ユウイを蹴り落とした後自分も飛び降りる。

「小竜、動くな、ここで待ってるよ。」

小竜に言って、またユウイを引き摺り森の中に少し入る。

「これ以上進めば僕も危ないな。」

キウティは呟き、ユウイを投げ捨てる。

すると、その衝撃でかユウイの目が覚めた。

もともとソルティ程完璧な眠りの魔法でもなく、階段を引きずられた事や突き落とされた事で魔法が解けたのだろう。

「…、？　っ！？なに、ここっ…そる、ソルティっ！」

「っ起きたのか！？くそ…っ。」

「や、やだ、ソルティっソルティ！たすけて！ソルティ、」

「黙れ！」

「いやー！！ソルティっ。離してー！！」

「この…！小竜といい、獣といい…！黙って言う事聞いとけばいいんだよ！」

ユウイを蹴る。

「獣がっ…人間様に、僕に逆らうな！あの化け物に気に入られたからっていい気になってんなよ！獣は獣らしく、人間の言う事聞い

這いつくばってろ！」

そこまで言われ、ユウイは動きも声も止める。

獣人を貧ずされたからか。

暴力を振るわれたからか。

それともソルティを化け物と呼ばれたからか。

どれが理由かは分からないが、腹の底から怒りが湧いてくるのを感じた。

命令も理不尽もないアーカイル家の生活に、少しでも慣れていたからだろう。

以前の、施設での様に無力感はない。逆らう気力があった。

「――はなせっ！」

叫ぶと同時に、キウティの腕に肘を打つ。

「いっ…た、この…っ獣が！」

キウティが言い終わる瞬間、頬にユウイの蹴りが入った。

「っぐあ！」

倒れはしなかったが、尻を着く。

所詮は実戦も行った事がない、安全な中で訓練していたキウティ。痛みに耐性はない。

ユウイは震える声で、抑えていた感情を、考えずにはいられなかった思いをぶつける。

「わ、わたしが、わたしたちがっおまえらにんげんになにをした？」

「けものと、見下されるようなことなんてなにもしてないっ」

「おまえのようになんげんが、わたしたちになにをしたっ」

「わたしの、かぞくに、ともだちになにをした！」

「……っころしてやる…！」

明確な殺意だった。

キウティよりずっと幼い子供の、殺気だった。

「な——っ舐めるなよ、獣が。僕に勝てる訳ないだろ！」

一瞬怯むが、それを否定する様に大声を出して、準備していた風の下級攻撃魔法を発動する。

「お前が死ねよ！！」

キウティが放った魔法は、下級とはいえ攻撃魔法。

それをユウイは距離が近かった事もあり、正面から食らってしまった。

「——っ！」

「は、ははっいいいか、所詮獣が……」

そこまで言った所で、キウティの声が不自然に止まる。

ユウイが不振に思いそちらを見ると、周囲には沢山の赤い粒。

——目だった。集団で行動する凶暴な魔猪が、数十体。

いくら魔物が現れにくい入り口近くだとしても、長時間騒げば寄ってくる。

それもキウティは魔法を使った。ここに居ますと言っている様なものだ。

「う、嘘だろ…」

呆然と囁く。準備していた魔法は使ってしまった。

魔猪一体でも絶望的なのに、数十体…。

「っお前が囧になれ！」

キウティは倒れているユウイを突飛ばし、逃げようとする。

しかし既に囲まれていて、その動きに反応した魔猪に体当たりされる。

「ぐふ…！」

恐らく骨が何本かいっただろう。口に血が溜まる。

「う、な、なんでだよ…。僕じゃなくてあいつを狙えよ！」

ユウイにも魔猪は向かっていたはずなのに、何故か傷ひとつない。

勿論魔猪に言葉は通じず、大声を出したキウティに、更に向かう。先程とは別の魔猪が、大きな二本の牙でキウティの肩にかぶりついた。

「っうああああ！」

余りの痛みに声を上げる。それに興奮した様に、更に数体近寄ってきた。

「来るなっ来るな！嫌だ、っ！だれか、たすけっ」

死に物狂いで肩に刺さっている牙を抜き、背を向けて走り出す。

だが数体から一斉に体当たりされ、地面に投げ出された。

何本骨が折れているだろうか。もう動けない。

体当たりした魔猪達が甚振る様にゆっくり近づいて来た。

絶望の顔を浮かべるキウティ。恐怖から涙が止まらず、失禁までしている。

「っひ、う、うあ、嫌だっ死にたくない！父様、っ母様！」

内の一体がキウティの頭に牙を立てようと大きく口を開いた……が、突然魔猪の動きが止まる。

「――キウティ兄様。どうしました？そんなに焦って。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6688x/>

魔術師と獣人のお話し。

2011年10月27日00時53分発行